

これであなとも仙厓通

会期 2021年11月16日|火|-2022年1月16日|日|

会場 古美術企画展示室



出品No.16 仙厓義梵筆《あくび布袋図》

親しみやすい書画を通して禅の教えを分かりやすく伝えた仙厓さん。そんな仙厓さんの作品をさらに深く味わうための2つのポイントをご紹介します。

出品作品リスト

・前期は11月16日(火)～12月19日(日)まで、後期は12月21日(火)～1月16日(日)まで展示します。
・No.6,7以外の作品はすべて福岡市美術館の所蔵品です。
・都合により展示作品を変更する場合があります。

No	作品名	作者名・産地	時代世紀	品質	法量	コレクション
1	仙厓和尚像	齋藤秋圃(1769-1861)画、 仙厓義梵(1750-1837)賛	江戸時代 19世紀	絹本着色	縦62.8 横20.6	博多百年蔵コレクション
2	円相図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦31.3 横51.3	小西コレクション
3	円相図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦37.0 横49.0	石村コレクション
4	香巖撃竹図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 寛政9年(1797)	紙本墨画	縦104.4 横28.1	小西コレクション
5	弁才天図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦27.3 横11.2	小西コレクション
6	恵比寿図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦30.5 横47.5	九州大学文学部蔵
7	観音図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 文化11年(1814)	紙本墨画	縦84.5 横20.0	九州大学文学部蔵
8	行基大土図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦94.4 横39.3	石村コレクション
9	猫に紙袋図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦37.6 横54.0	石村コレクション
10	前期 鳳あげ図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦39.5 横26.9	石村コレクション
11	後期 犬図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦25.7 横35.8	石村コレクション
12	前期 牛図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦30.5 横47.5	小西コレクション
13	後期 双狗図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦31.2 横52.4	小西コレクション
14	猿図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦45.0 横54.6	石村コレクション
15	花見図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦32.6 横52.9	小西コレクション
16	あくび布袋図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦40.9 横53.0	石村コレクション
17	指月布袋図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦85.7 横27.3	石村コレクション
18	子孫繁昌図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦123.8 横49.3	石村コレクション
19	福神図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	絹本墨画	縦74.0 横33.0	博多百年蔵コレクション
20	宝満山図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦29.3 横61.4	小西コレクション
21	虎図	仙厓義梵(1750-1837)	江戸時代 19世紀	紙本墨画	縦94.0 横57.3	石村コレクション



福岡市美術館
FUKUOKA ART MUSEUM

〒810-0051 福岡市中央区大濠公園1-6
TEL 092-714-6051(代表) FAX 092-714-6071
www.fukuoka-art-museum.jp

いつ描いたのか？

仙厓さん（**作品1**）は寛延3年（1750）の生まれで、88歳まで生きました。博多で暮らし始めた40歳前後から絵を描き始めたようで、50年近い画歴があることになります。これだけ長いと初期と晩年とでは作風が大きく異なるのは当然のことで、仙厓さんがいつ描いたのかを考えることは、彼の作品を理解する上で重要な手がかりとなります。

まずご覧いただくのは2点の《**円相図**》（**作品No.2、3**）です。どちらも円を描いて、その隣に仙厓さんによるコメント（賛）を記したのですが、比べてみると随分と違いがあることに気づきます。特に大きな違いは、賛の長さでしょう。

作品3の方は「これくふてお茶まひれ（これでも食べてお茶をどうぞ）」とシンプルなコメントであるのに対し、**作品2**は読むのも嫌になるくらいの大長文章が寄せられています。内容を要約すると、「世の中には仏教や儒教、神道など様々な教えがあるけれど、それらを全て包み込むのがこの円相である。」といいます。つまり、立場や価値観の違いを強調するのではなく、共通点にこそ目を向ける、そうした心のありようの大事さを説いているわけです。

そもそも、円相とは禅僧が自らの悟りの境地を示すために描くものであり、**作品2、3**に描かれた円は仙厓さんの悟りそのものというわけです。ですから、長大な賛が付された**作品2**は仙厓さんが自身の宗教観を宣言したマニフェストであるということができでしょう。厳しい修行の末に体得した悟りに対する強い自負心をうかがうことができるかもしれません。

一方、同じ円相図でも**作品3**では印象が異なります。円相の隣には「これでも食べてお茶をどうぞ」と添え書きし、自身の悟りの象徴をまるでお茶菓子のように、そんざいに扱っているのです。**作品2**と比べるとすっかり肩の力が抜けたようなコメントですね。円相自体もぷっくりとしていてなんだか親しみがわいてきます。同じ仙厓さんの作品なのにどうしてこれほど違いがあるのか？結論から申し上げると描かれた時期が違うからです。**作品2**は60歳前後、日本最初の禅寺である聖福寺の住職として現役バリバリだった頃のものです。一方、**作品3**は70代後半から80代頃、激務であった聖福寺の住職を隠退し書画三昧の日々を送っていた頃の作品です。

この2点の円相図の比較からも分かるとおり、仙厓さんの作風は初期と晩年では大きく異なっていて、初期では人を寄せ付けけないような鋭さがあるのに対し、晩年では見る人をほっこりさせるような温かさが感じられます。

それでは、この初期から晩年にいたる仙厓さんの画業を駆け足で見えていくことにいたしましょう。

《**香巖撃竹図**》（**作品4**）は仙厓さんが48歳の時に描いた作品で、制作年が分かるものでは一番古いです。箒を手にした香巖和尚の顔は暗く沈んでおり、私たちが知っている仙厓さんの作品とは似ても似つきません。

それから仙厓さんの初期作として紹介しておきたいのが学問や技芸、富をつかさどる神である弁才天の尊名を揮毫した書跡（**作品5**）です。本作において仙厓さんは「梵杜多」という印章を用いています。梵とは仙厓義梵の梵、つまり、自身のことで、杜多は「頭陀」とも書く修行中の僧侶を指す言葉です。この「梵杜多」という印章は、当時の仙厓さんにとって書画の制作が修行の一環としての意味合いを有していたことを示しています。

先ほど紹介した**作品4**も、禅僧がふとしたきっかけで悟りを開いた場面を描いたものです。ですから、自身の修行、もしくは弟子への指導といった意味合いが強かったはずです。こうした作品が親しみやすさを感じない作風であるのは当然でしょう。住職を隠退する間際の60歳以後になってくると、からっとした笑顔が印象的な作品（**作品6**）も描くようになりますが、総じて謹直な作風を守り続けたようです。

こうした作画に変化が生じたのは、62歳の時に聖福寺住職を隠退したのがきっかけであったと思われます。65歳の時に描いた《**観音図**》（**作品7**）は、さわやかな笑顔が印象的な作品ですが、賛文には他人の利益の為の行いは全て観音菩薩の慈悲の心に通じると記されています。この賛文は住職時代の作品とは趣が違っていて、住職時代はあくまでも自身の修行のため、あるいは、弟子の指導の為の作画であったのが、他人の利益の為の作画へと意味合いが変化したことを意味します。

それを象徴する作品が《**行基大士図**》（**作品8**）です。行基は奈良時代に活躍した僧侶で、民衆のために様々な公共工事を行ったことから行基菩薩とよばれて崇められました。菩薩とは、自身の為だけでなく他人を救済しながら修行に励む仏のことです。仙厓さんにとって絵を描くことは、他人の救済、すなわち菩薩行の実践であったようです。その証拠に、本作の落款（署名）には「仙厓并」と記されています（并は菩薩の略字です。）。

住職を隠退したのちは菩薩行の実践としての作画に励んでいた仙厓さんですが、彼には悩みがあったのではないかと思います。それは、**作品7、8**のように、やたら、賛文が長くなってしまうことです。禅宗には不立文字（真理を文字で伝えることはできず、体験によって伝えるべき）という考えがありますし、そもそも、長すぎる賛文は、悟りを分かりやすく伝えたい、という仙厓さんの思いとは裏腹にとっつきにくい印象を鑑賞者に与えるのです。

そこで、仙厓さんが次なる策として試みたのが、説

明的な要素をできるかぎり省いて、直感的に人々が思いを共有できるような絵を描くということだったのではないかと思います。平たく言えば、「かわいい！」とか「楽しい！」とかバツと見てビビッとくる作品を描こうとしたということです。愛らしい子供や動物の絵（**作品9～14**）を見れば、理屈抜きで頬が緩んでしまいますし、花見をしながらどんちゃん騒ぎに興じている様子を見ると（**作品15**）、思わず笑いがこみ上げてきます。

ここで思い出していただきたいのが、《**円相図**》（**作品2**）の賛文に記された若き日の仙厓さんのマニフェストです。すなわち、立場や価値観の違いを強調するのではなく、共通点にこそ目を向ける、ということです。これを実現するための手段が、同じ作品を見ることで、同じ思いを共有するということだったのではないのでしょうか。

仙厓さんは長い画歴の中で様々に作風を変化させてはいますが、作画を通して伝えたいメッセージは一貫しているのだ、ということがお分かりいただけたのではないのでしょうか。

誰の／何のために描いたのか？

次にご覧いただくのは2点の布袋図です。どちらも親しみやすい姿の布袋を描いた作品ですが、仙厓さんによるコメントは随分違います。

まずは《**あくび布袋図**》（**作品16**）について。漢字だらけで、読む気になれないかもしれませんが、次のようなことを述べています。「釈迦が亡くなって、次なる救世主である弥勒が現れるのもずっと先のことだ。私もすっかり衰えてしまったものだ。夢の中で伝説的名君である周公にお会いしてから時がたってしまった」。つまり、救世主となるような優れたリーダーがいなかったためにすっかりと世の中が乱れてしまった、ということ布袋のセリフでもって強烈に皮肉っているわけです。賛文が全て漢字であること、また、その内容が経典や論語などの知識がないと理解できないことを考え合わせると、本作は知識人に対する仙厓さんからの警句として描かれたと思います。布袋の姿が愛らしいだけに、かえってメッセージの強烈さにぎょっとさせられます。

それから、《**指月布袋図**》（**作品17**）について。こちらは**作品16**とはうってかわって、「あの月が落ちたら誰にやるふかひ」という平易な賛文が記されます。このことから本作は知識人ではない人に対して描かれたと想像できます。では、本作を通して仙厓さんは何を伝えようとしたのでしょうか？賛文から月夜の情景が描かれていることは明らかです。画中の布袋が指を上へ向けているのは、月を指さしているということなのでしょう。ただ、肝心の月の姿がどこにもないのはどうしたことでしょう。実はここでいう月とは悟りのこ

とです。どこかにあるはず、だけど姿の見えない月を探すのは、禅僧が悟りを求めて修行をすることと似ています。つまり、本作の鑑賞者は知らぬ間に禅僧の厳しい修行の追体験をさせられる、というからくりがこの絵には仕掛けられているのです。

この2点の比較からも分かる通り、仙厓さんは絵を通して誰に何を伝えるのか、ということに対してきわめて自覚的でした。ですから、仙厓さんの絵を鑑賞するときに「この作品は誰の／何のために描かれたのだろうか？」と想像してみることは、作品の魅力をより深く味わうための有効なアプローチとなります。

例えば、腕白な男の子と困り顔のお父さんを描いた《**子孫繁盛図**》（**作品18**）、仙厓さんからのコメント（賛）は「子どもが成長してお父さんになって、そのまた子供が成長して…という風にちゃんと子孫は続いていくのだから心配しなくても大丈夫」という心温まる内容です。子育てに疲れたお父さんを励ますために描いたのかしら、などと想像をめぐらすと、ほっこりとした気持ちになります。《**福神図**》（**作品19**）にも、災いを転じて福となす、というようなコメントが寄せられており、仙厓さんが博多の人びとの悩みを絵を通して解消していった様子がうかがえます。

一方、名勝地として知られる柱島を描いた作品（**作品20**）は、どのようなシチュエーションで描かれたのでしょうか。旅行好きだった仙厓さん。おそらく旅先の感動を記憶に留めるために描いたものと想像します。傍らには仙厓さんによるコメントも記されており、友達に「こんな所へ行ってきたよ」とお知らせするためだったのかもしれません。

おわりに

いかがだったでしょうか。鑑賞するときに「いつ」「誰の／何のために」描かれたのかを考えることは、仙厓作品の魅力を理解する有効なアプローチであることがお分かりいただけたと思います。実は、この2つは私たち研究者が作品を理解するために用いる手段でもあります。

それでは、最後に《**虎図**》（**作品21**）をご覧ください。この作品は仙厓さんからのコメント（賛）がないために解釈が大変難しいです。最近、「いつ」「誰の／何のために」という視点から作品解釈を試みる論文が発表されました（**中山喜一郎「仙厓雑論「虎図」の正体」『福岡市美術館研究紀要』第7号、2019年**）。この論文は、会場内、および当館2階の情報コーナーで閲覧可能です（当館のHPでも閲覧可能）。お読みいただき、皆さんも謎解きにチャレンジしてみてください！

（学芸員 宮田太樹）